

博物館 アラカルト 12

祝寿詩画帖

「人生七十、古来稀なり」といい、七十歳は古希のお祝いをします。子や孫、知り合いからお祝いの品物を贈られたりします。備後国神辺の儒学者・菅茶山も文化十四年（1817）に七十を迎えました。この時に全国から、茶山の古希を祝う贈り物が届けられています。「寛政の改革」で知られる松平定信からは寿杯と寿歌、谷文晁から絵画、その他多くの文人たちから詩歌は、「七十賀寿詩巻」にまとめられています。また塾生たちからも詩歌を贈られ「七秩寿詩巻」にまとめられており、こうした資料から茶山の人柄が偲ばれます。

今回、紹介する「祝寿詩画帖」はそうした贈り物のひとつで、およそ31cm×29cmの折本装で、同じ規格の紙あるいは絹を使用しています。詩画帖を収める木箱には、「祝寿詩画帖

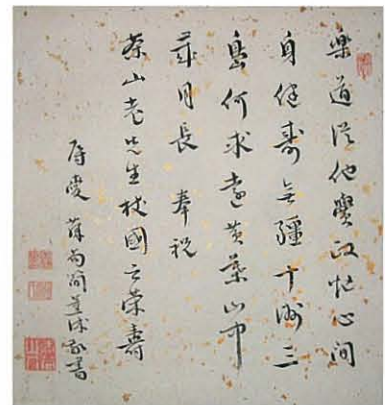
東讃藤苟簡謹具」と高松の文人 後藤漆谷(1749～1831)の筆で墨書されていて、後藤漆谷が近しい讃岐の文人に声をかけて作成したものです。漆谷は、名を苟簡、字を子易または田夫、通称を勘四郎といい、初め木齋、後に漆谷と号しました。後藤芝山に学び、能書家として知られています。漆谷は度々、廉塾を訪れています。この詩画帖は、後藤漆谷をはじめ、奥村鹿江・菊池守拙・佐々木雲屋・梶原藍渠・大原東野・鈴木青玉・久家暢斎・阿部良山・中條東坨など讃岐を代表する文人たち25名が茶山の七十歳を祝っています。讃岐の文人たちの交流を示す貴重な資料ともいえます。

いずれも、見ているだけで、気持ちが伝わってくるような気がしませんか？茶山の日記によれば、二月二十七日頃に茶山のもとへ届けられています。さらに、日記からは、この詩画帖が友人何人かに貸し出されていることもわかり、茶山にとって大変嬉しい贈り物であったと思われます。

(主任学芸員 岡野将士)



阿部良山



後藤漆谷



中條東坨



鈴木青玉